2022.9.1

現代俳句千葉

146号

巻頭エッセイ

花鳥の誘い

副会長　長井　寛

鎌ケ谷市に暮らして五十年の歳月が流れた。ある日東京の下宿先での新聞広告が目に留まり、一人鎌ケ谷に行ってみようと思い立った。それが第二の故郷の始まりとなった。都心まで一時間余、成田新国際空港にも近い新しい街に親近感を覚え、この地に住む事に決めた。以来「住めば都」の諺通り住宅の窓の灯火に慰められながら日々を過ごし、新しい土地柄にも馴染んでいった。近くの公園にまで脚を伸ばすとそこは自然の宝庫、四季折々の環境に恵まれた別天地であった。新年になると神社仏閣への参拝、間もなくすると春、鶯の初音を聞き、道行く人と声を掛け合い至福の喜びを共有する。やがて梅が咲き、辛夷の木々が真っ白い花々を付ける。その後を桜の景色がつづく。特記すべきは梨の花、桜雲にも負けず劣らず、魔法の白い絨毯が広い大地をすっぽり覆う様は筆舌に尽くし難い。

夏になると燕が南の国からはるばる海を渡って飛んでくる。毎年パン屋の軒下に営巣する。戻らない親鳥は子燕に思いを託しているに違いない。また私の指笛にほととぎすが天空より「税金掛けたか」と答えて鳴くので指笛で答える。行く末の空に秋の気配が漂うころ台風の襲来を察知した鵯が大仰に鳴く。百舌鳥の高鳴きが響き、木守柿に百鳥が欣喜雀躍する。雁が木枯し一号に乗って北帰行、水面には寂しさだけが残る。

寒い冬になると渡りを諦めた浮寝鳥がぽつんと一羽所在無さそうに時を弄んでいる。寒さ故に早朝の白鷺や五位鷺は近づいても別に警戒する素振りも見せない。人を友達だと思っているにちがいない。

昨今、身辺を取りまくそんな花鳥は一句を歌に詠むまで私を束縛して離そうとしない。花鳥とていつも優しいとは限らない。時に厳しく迫ってくる。「言いおうせて何かある」「不即不離」「二物衝撃」などの難題を突き付けてくる。花鳥に急かされながら俳諧の道にさ迷っている最中、その心髄は誠に奥が深いものであると感じている今日この頃である。

目　次

花鳥の誘い　長井　寛 …… 1
諸家近詠 …… 2～5
会員・会友の近況 …… 2～3
新会員・会友紹介 …… 5
私の感銘句 …… 6～9
津田沼研究句会報告 …… 10
青葉研究句会報告 …… 10～11
柏研究句会報告 …… 11
君津研究句会報告 …… 11
ひろば・図書紹介・掲示板 …… 12

千葉県現代俳句協会会報

諸家近詠

木瓜の花遊び上手な風が来る　羽村美和子
カサブランカ副反応に軽い恋
夢追い人青い薔薇を植えてより
式部の実ほろほろ風の覚え書き
冬の靄ビルは発射の構えして

踏みだせる義足に力春隣　八島　岳洋
白魚舟朝日掬ひに出るところ
猿麻桙（さるおがせ）古代大陸移動説
パンゲアの大陸広し赤海鼠
ロボットの働く廃炉水澄めり

コロナ禍も史実の隅や蓬摘む　中山　皓雪
映る雲映らぬ世相代田水
田植どき油の臭ふ機の始動
八月六日写経の墨に朝日さす
沖縄忌断崖に立つ手と手と手

九条を女説くときレモンの香　吉野　精
彼を追う自由が丘の夏の蝶
ナイヤガラわれも小さな滝おとす
少女の瞳氷河の湖にそまりたる
アラスカにキリン暑くて首をだす

花は葉に停ったままの救急車　安井　三緒
梅雨晴間園児がのぞく喫煙所
津波礎やハマヒルガオの刑部岬
敬老日花束にも向きがある
蕎麦の花ときどき湖の色変わり

目刺見つめる大海鬻る粗凡夫　藤好　良
三省堂本店一時閉店虞美人草
たをやかな妻の定位置水羊羹
マーメイド号時空往還夭夭（えうえう）と
六月のピッチャー大谷燃え吼える

四度目のワクチン予約夏の果　三上　啓
日常が戻りつつあり油蟬
不機嫌な地球の息吹きかき氷
若人にバトンタッチよ大楠
ほとばしるドラムの少女天高し

白魚網雲こぼしつつ引き上げる　馬渕　津枝
A列車でいつかは黄泉へ紅椿
東風吹くや象の福耳ざわめいて
あせてきし私も夏の砂浜も
青嵐病院駐車場満車

父の椿血の色いざ生きめやも　柳本　ゆみ
川の字の乱れはじめる花火の夜
虹の橋羽を持つもの許される
水切りの石母の日の男の子
失敗談ふくらんで案山子の臓器

土煙たてる戦車や麦の秋　前島きんや
シャボン玉冷血漢のわらひごゑ
合谷の犬の咬み跡遠花火
夏帽子地下鉄女性専用車
リモートの会議弓手の缶ビール

《会員・会友の近況》

・とんでもない微菌に襲われ、左脚を失って五年目。家内も体調が悪くなり、二月に松戸の施設に入所しました。幸い私には俳句という趣味があり、退屈することもなく元気で過ごしています。句友の皆様今後ともよろしくお願いいたします。（八島　岳洋）

・生れも一人、死も一人。生ある限り強く生きよと毎日リハビリ体操に励んでいます。卒寿を過ぎましたが、足にもいくらか筋肉が付き、杖もつきません。これからも俳句を杖として頑張っていきます。（中山　皓雪）

・「俳句と仕事が車の両輪」を信条として十五年、仕事に片寄りがちの現状です。皆様の秀句を勉強しております。（前島きんや）

・相変わらず忙しい毎日ですが、確実に年を取りました。（森村　文子）

・ただただコロナの終息を祈る日々です。（横須賀洋子）

・「現代俳句千葉」楽しく読ませていただいております。拙句を掲載していただき誠にありがとうございます。（松岡　節子）

・コロナ禍も二年余り。俳句を頭の体操等といいつつ、いつまで生きているものやらと俳句の恩恵に預かっております。（山口　彩子）

・小生、既に老耄甚だしく、それでも何とか今迄の仕事、版画と蝶の標本整理と俳句、細々と続けております。（増田　陽一）

・フィクションであったら、と思う出来事ばかりの日々、俳句を作っている場合かと迷うこともあります。しかし、前向きに生きるためにも俳句は必要だと都合よく考えてもいます。（松本　千花）

・学習塾で小三生を教えています。子どもた

諸家近詠

ちちははの触れたと思う白梅よ　森村　文子
すこし寒い春風のよう君は
砂のなか砂流れゆく六月よ
漆黒の特急列車天の川
夏青空歩いて休んでまだ遠い　横須賀洋子

而して戦は止まず梅雨明ける
少年に音無く抜かれ五月雨るる
善人はなべて不自由さくらんぼ
紫陽花にひといろ足して別れんか
はつ夏のおもちゃ箱から煙立つ　松本　静顕

人脈の減りゆく八十路や雲の峰
逃げ惑ふ子等を励ませ百日紅
新涼や背筋のばせば古老にも
コロナ禍とは訣別したし泡立草
白髪を洗えば明日への希望湧く　深山きんぎょ

明け方のさびしき夢や夏の月
横断の先頭は犬夏の朝
何処へでも行けさうな空青田道
物干しのシャツ翻り昼寝覚
万緑の山に抱かれ少女の死　増田　元子

おーい見ろよと絶品の二重虹
手指消毒回向柱に触れて夏
緑陰に信玄公も謙信も
唐揚げにレモン感染者は最多
口角をもっと上げましょ夏は来ぬ　松岡　節子

心柱囲む仏や今朝の秋
宇宙船船長還るりんご真赤
国旗掲揚台何もつけない十二月
風青しチャイナドレスの纏り縫ひ
葉桜や蛇口の光る新校舎　山口　彩子

東京に生涯疎く葱の花
蓮根掘る子の胎動を聴くごとく
うすうすと若葉にわが身解き放つ
さりながら昭和は遠く青葉木菟
十薬は遠近法を知りつくす　山中とみ子

原稿の枡目の歪み熱帯夜
灯台の一灯一色土用波
食足りて不安な世なり八月来
猫じゃらし日に日に多くなりし誤字
点滴がくるわず月の夜を刻む　増田　陽一

幼年は夢老年は朧なり
安房春光猪鹿のみか羌(きょん)も啼く
蛇穴を出て行く処なかりけり
烏賊墨パスタ黒海に艦沈む
わが視野に眉濃き鵜明日はシベリア　松本　千花

おむすび山は中立地帯夏の霧
青鷺や待つは疑ひのはじまり
ときめきの角度に足らぬ夏帽子
決めかねるこの世の始末古代蓮
青蔦や秒針だけが壊れたようだ

ちの思わぬ発言が面白く、句会とはまた違った刺激を受けています。（松村　五月）

・リモートでは雑談もひそひそ話もできないので、テレワークが苦手です。雑談から生まれるアイディアって大事だと思うのですが。（宮本美津江）

・不安だらけの世の中に、俳句のある生活に救われています。月一度の句会で人と会い、作品との出会いが楽しみです。（森　孝子）

・夏の東北三県を旅した。白神山地の母なる大地の包容力に包まれ、下北仏ケ浦で奇岩の仏に会うことができた。圧巻は吉永小百合が絶賛した五能線の夕日。落日がジュジュジュと音立てて沈んでいった。（三浦　侃）

・加齢の精か一つ体調を崩しますと次から次へ病気が病気を呼んでいますが、俳句のおかげで平常心を保っています。（保坂　末子）

・新型コロナで日程が定まりません。人と人が合うことが難しい時代にどう対処していくか試されている気がします。（藤井　稜雨）

・白内障を手術。今迄はつん読の状態だったが手術後は、はっきりとよく見える。ストレス解消・感動・感謝！（元橋　孝之）

・中村棹舟先生が逝き一年。精神的にがっくり。この度の出句依頼で俳句を作ろうという気になった。編集部の皆さんありがとう！（山田　邦彦）

・七月一日から三十一日まで、大分由布院アートホールで、デザインアートの個展を開きました。（樋口　博徳）

・外出も億劫になり家に閉じこもっていますが、諸家近詠のお手紙嬉しく存じました。千葉先生にもご無沙汰しておりますが、俳名「遊子」を頂いて大変嬉しかったことなど懐かしく思い出しております。（宮野　遊子）

マスクごと外して使ひ捨ての顔
うららかに「ダンゴムシつて季語ですか」
飛花落花どのひとひらが魂か
風光るたびにどうにかなつてゆく
栗の花手の鳴る方へ靡きたし

宮本美津江

二十日月笑っているか幸せか
泊夫藍と知らず男と女かな
正解に辿り着けたら台風圏
夜に散るなりさくらいろの桜
金縁の皿に浮かべる春の月

松村　五月

下総に筑波ならいの吹き下ろし
田水張る水面に雲の流れ行く
験担ぎ無言詣の少女かな
麦笛を吹く子と帰る夕の暮
雷鳴に動ずることのなき茶室

菱木　良一

大仏や目を伏して聞く春の潮
春暑し地球はいつか角砂糖
滑り台逆に登る子大夕焼
鬼灯や鳴らせば青き海の見ゆ
振り返る笑みに面影夏帽子

林　みさき

単線や轉りはさむ文庫本
花菖蒲ひとりの時間深まれり
ほーほたる片手はいつも空けてある
この先はシルクロードよ瑠璃蜥蜴
国境焦土の色に夕焼けり

星野　一惠

羅に通す一筋九十路
轉りや早寝早起き燕の子
蝶去りて新樹の欠片残りけり
貝風鈴思い出の風つれてくる
老ゆるとはこんな事かや万愚節

森　孝子

日脚伸ぶちよつとバスでの買物に
夢叶ふまでもう少し春の虹
思ひ出の壺のふくらみ春灯
春めいて風がたびたび呼ぶ戸外
失敗の上の失敗石鹸玉

増田　豊子

げんげ野に遊べ毀れゆく母よ
春の夢いつまでつづく無言劇
天空を統ぶ荒星を狼という
父祖の地に父祖の歳月地虫鳴く
人間をやめる日ふくろうになる日

細根　栞

万葉の歌の心や合歓の花
蝸牛身の振り方を考える
生き伸びる為の芸なり羽抜鶏
黴付けという入魂や鰹節
俄かに雹シェルター構想なるものを

実籾　繁

心経と重い祈りの釣忍
合鴨の自在に潜る青田波
風鈴の呟きもない昼下がり
大夕焼会える日がまた近くなる
空蟬やトラック島の墓標朽ち

三浦　侃

木洩れ日をつなぎ合せて夏帽子
鉄臭の風の下町つばくらめ
戦とはたんぽぽ踏まれてしまうこと
水音を逸れたる水を四十雀
さんさんと蛇結茨（じゃけついばら）の花芽上ぐ

保坂　末子

愛鳥週間旅先といふ孤独
卯の花腐し真夜のホテルの機械音
メーデーやテーブル小さき喫茶店
父の日や馴染の店の大鏡
足元に神様おはす夏野かな

藤井　稜雨

遠卯浪行雲映す千枚田
蛙鳴く一国主の千枚田
夕焼雲琴を爪引く鄙の宿
跳ね軽しひよつとこ面の街の夏
香水を鎧のやうにまとふ女

元橋　孝之

隅々に万緑を吸い石清水
桔梗花水飲み終る軒の下
かき氷あずき抹茶の濃き店に
元総理戦後日本が震えだす
炎天や電気節約日本中

山崎　公子

吐噶喇とは火を吐き　揺れる　倭国の名
火を噴く島へ還る少女の眼は群青
びろう樹は死んだか　時間止まった離村の島
死時計は止まったままに生者の刻
合歓落花　止まった秒針　蕊の振れ

政成　一行

諸家近詠

合歓の花網走監獄博物館　吉岡　一三

怠惰なる噴水ならばローマにも
対岸を疑いもせず蛇渉る
命充ち重たく暗く蟬の森
湖の哲学的な色晩夏

仕組まれたネット通販うなぎ来る　森　ふみ子

食べられるストローの穴麦の秋
晩年へ願いの糸の切れそうな
薔薇の棘ならば許せる仲直り
母の日の絹の靴下五本指

籐寝椅子背中を海の風走る　山田　邦彦

夕焼の薄くなるとき母の声
海色の風に染まりし蟬の殻
灯台は海のローソク浜おもと
夜の秋柳田國男の民話集

火の雨降る戦史の一日夏木立　樋口　博徳

収穫の笊の小梅に手がじゃれる
啓蟄やお天道様の青い道
にわか雨蛇穴を出て引き返す
朝焼けの大阪グリコのバンザイ

梅が香や源平咲きの風静か　福田志津子

この先はゆつくりゆこか花筏
農夫逝くこの万緑の風の中
八十に読点を置き夏に向く
日溜りをセーターの背に持ち帰る

燕待つ今日をつむいでゆく言葉　藤田　富江

母子草母という字を円く書く
風光る煌めくものをキャンバスに
梅雨滂沱安堵の色に閉じ籠る
虚無の中つんつんつんと蘆の角

梅雨晴間あの雲どこでどうしたの　宮野　遊子

五月晴雀つばめはまだねぐら
あの人の巣立ちし町の桜咲く
空蟬やあとを頼むと葉の裏に
赤とんぼ野辺でうたったあの頃は

芽柳の下ならきっと賢治来る　林　ゆみ

逢いにゆく半身は魚夜の新樹
どくだみの音なき昼へすべり台
謎解きのはじめは轍梅雨の蝶
月涼ししずかに細く書家の息

たった今を忘れています凌霄花　山中　葛子

春かみなり死をはるばると狂わせて
おわらぬコロナとても鮮血若冲忌
死ぬという普通のはなしりんご剥く
鰻のかば焼き晩年の胸騒ぎ

しあはせは今が一番青き踏む　宮下　奈緒

清明や丸く生まれて丸く逝く
百幹の脈打つ音や夏きざす
自然からいたゞくいのち稲の花
初場所のしこ名の字面惚れ惚れす

新会員・会友紹介

四街道市千代田　西村　峰子（会友）
（推薦者　並木　邑人）

蘖や生き抜くすべを戦禍地へ
万人の想いを積みし花筏
菜種梅雨端切れ広げソーイング

四街道市千代田　新澤　誠（会友）
（推薦者　並木　邑人）

威圧的孕雀の食べっぷり
落葉時雨農道もっそりと動く
青葉の沢ママ呼ぶ声の残響す

千葉市美浜区　立神　作造（会員）
（推薦者　木之下みゆき）

舐める子の手にしたたりし氷菓やせ
暑き日の社の塗りはなお朱く
参道の木の葉揺るがす蟬しぐれ

令和五年度俳句大会 作品募集

千葉県現代俳句協会では作品の募集を行います。参加要項は同封のチラシをご覧ください。

なお、今回より高校生の部を新設、作品も募集いたします。

詳細は次号（十二月一日発行）にてお知らせいたします。皆様のご参加をよろしくお願いいたします。

投句締切　令和五年一月三十一日（火）

私の感銘句

	作者名	号	頁
山崎　幸子			
生ひ立ちにいつも風吹く竜の玉	高橋　健文		1405
チューリップ生徒のいない小学校	高橋　宗史		1406
飛雪それは室を飛び出す酵母菌	並木　邑人		1406
薄氷のかたちになってゆく晩年	長井　寛		1414
風船売やがてピエロになっちゃった	細野　一敏		1416
べんべん草生えしあたりがおもしろい	細根　栞		1416
山法師子どもら息を太くせよ	秋尾　敏		1425
ふたりで老う十薬の花まっ平ら	山中　葛子		1425
はないちもんめ過ぎし日は花曇	黒澤　雅代		1436
手のひらに広がる空き地鰯雲	木之下みゆき		1437
ふたりで老う十薬の花まっ平ら	山中　葛子		

十薬は「どくだみの花」と言われ薬草であり、その薬効で親しい草木である。

夏の木漏れ日の中に白い十薬が見事である「十薬の花まっ平ら」と作者は詠む。夫婦ふたりが安泰に老いを感じつつ生きている姿を重ねている。増々ゆっくりと元気に日々を重ねて下さい。

鈴木まんぼう			
青の残像翡翠は印象派	長濱　聰子		1405
ヒヤシンス鬱のひとつが星になる	羽村美和子		1407
春や遅しみんなみを向く鷺の首	長井　寛		1414
擦れ違ふとき早春のにほひけり	岡田　春人		1425
ぺたぺたと七軒町の残り鴨	岡田　淑子		1425
海神へ汗つやつやと孕み馬	伊藤　希眸		1426
寒晴や宅配でくる守り札	吉田　耕史		1426
別れきて先ず手を洗う聖五月	渡辺　澄		1427
ふるふるとゼリーぶるぶるとオスプレイ			
ゴージャスなアサギマダラのハネムーン			
福田志津子			
小春日の猫の丸みや物忘れ	神作　仁子		1436
たじろがぬ八つ手の花やゆるみなし	木之下みゆき		1437
かたつむり頑張らなくていいんだよ			
玉のような欠伸をひとつ雛明り	なかもと淑子		1414
初つばめ田毎の水に捉えけり	日野　葉子		1414
新涼やじっと火を待つ登り窯	細根　栞		1416
透明の傘のひかりも夏めきぬ	高橋富久江		1416
青柿のどすんと記憶抜け落ちる	矢野　忠男		1425
残る虫昨日に戻る道はなし	大澤　重市		1427
桐一葉散って老人騙される	飯島　昭子		1427
泉　志眞子			
ほろほろと人を忘るる草の絮	興津　恭子		1435
ひぐらしや残り時間が逃げていく	加倉井允子		1435
句を詠むは死者との対話小望月	小林　実		1435
ヒヤシンス鬱のひとつが星になる	清水　伶		1404
看たはずが守られし歳月牡丹散る	長濱　聰子		1405
擦れ違ふとき早春のにほひけり	高橋　健文		1405
老いたるはほどけゆくごと紅椿	羽村美和子		1407
キャタピラー戦なき世の稲を刈る	高橋富久江		1416
銀河濃し人との別れ幾たびぞ	岡田　春人		1425
武器持たぬ自粛も戦幟立つ	大見　充子		1434
杉山眞佐子			
水仙の系図いちばん上は海	山中　賴子		1434
初刷や天地を分けるごと開き	久保　筑峯		1435
大マスクそよいでみたい耳がある	金子　未完		1437
囀りの同心円の縁にをり	直江　裕子		1405
	中嶋　三雄		1405
	羽村美和子		1407
	藤井　遥		1416
少女いま抱へ切れない薔薇と棘	福田志津子		1417
権力のもどせばゆがむ捩花	秋尾　敏		1425
多喜二の忌冷めて再び滾る白湯	三好美穂子		1427
わくらばは風のうろこか定型詩	菊地　京子		1434
流星や闇の力の緩むとき	佐々木幸子		1436
八月の空の蒼さを静止という	黒澤　雅代		1436
川上　典子			
突き当たるたびに道あり秋の声	永妻　和子		1404
水仙の系図いちばん上は海	直江　裕子		1405
進化論なんて嘯く海鼠かな	鈴木まんぼう		1406
平凡がいい日溜りのすみれ草	高橋　宗史		1406
息災をこぼさぬように梨を剥く	富澤さち子		1406
黒々と代々を息づく春の土	末廣　陽惠		1415
急ぐなよ急げば消える春の夢	富澤ムツ子		1415
繃帯の巻けぬ傷なり椿の実	倉持　紀子		1435
残る虫昨日に戻る道はなし	加倉井允子		1435
あまたある届かぬ祈り雛人形	木之下みゆき		1437
繃帯の巻けぬ傷なり椿の実	倉持　紀子		

「繃帯の巻けぬ傷」は、「繃帯を巻けば治る傷」よりも癒えるには時間がかかる、否、癒すことのできないかもしれない傷でしょうか。厚い果皮の中に暗褐色の熟した種子を持ち、その種子の中には椿油が。さまざまなものを内包している椿の実と繃帯の巻けぬ傷が重なり、季語も深いと思いました。

倉岡　けい			
山鳩の野を曳くように秋霖よ	徳田　悠子		1406
釣り糸に冬を結んで丸くいる	保坂　末子		1416
ふらここの言霊映画より静か	市川　唯子		1425

青いレモン遠きあの日の忘れもの　石井紀美子　142 6
語りつくして晩秋の本の森　三好美穂子　142 7
蓮ひらくそれは母子の会話のよう　山﨑　政江　143 4
泡立草指の先まで好奇心　小野　功　143 5
色のない芒が原の最終章　小池美佐子　143 6
漂泊の雲の寄り来る凧　金子　敏　143 7
あまたある届かぬ祈り雛人形　木之下みゆき　143 7

林　ゆみ

鶏頭を素描にすれば荒野なり　清水　伶　140 4
水仙の系図いちばん上は海　直江　裕子　140 5
皇帝ダリア風に野望を盗まれて　羽村美和子　140 7
どこまでの炎天いつまでの汚染水　徳吉洋二郎　141 4
なんかいも生まれかわって黄落す　森村　文子　142 4
水草生うわたしは空へ行く途中　市川　唯子　142 5
居ますから無風にゆれる百日紅　吉岡　一三　142 6
多喜二の忌冷めて再び滾る白湯　三好美穂子　142 7
金魚反転夕暮がこわれそう　久野　康子　143 5
ほうほたるどこかで遭っていませんか　木之下みゆき　143 7

なかもと淑子

百日の家居さくろの実は真つ赤　千葉　信子　140 5
侘助に呟き残す一人旅　田村　麗　140 7
さようなら言えず手袋うら返す　保坂　末子　141 6
春だからひたすら乗る内房線　三宅たくみ　142 4
今以て昭和の夜店這い回る　門谷　杜人　142 4
烏瓜遠くが見えてさびしかろ　森村　文子　142 4
ふたりで老う十薬の花まっ平ら　山中　葛子　142 5
キルト刺す一針ごとに掬う秋　川上　典子　143 5
はないちもんめ過ぎし日は花曇　黒澤　雅代　143 6
こぼれ萩坂ことごとく男坂　片岡伊つ美　143 7

島田　翠松

水仙の系図いちばん上は海　直江　裕子　140 5
三が日まだひらがなのままである　普川　洋　140 5
フリードリヒ・ニーチェを蹴りて水鳥よ　武田　伸一　140 6
コロナ禍は歴史の継目梨をむく　中山　皓雪　140 6
フロイデのひと声ふくら雀かな　中里　結　140 7
皇帝ダリア風に野望を盗まれて　羽村美和子　140 7
風船売やがてピエロになっちゃった　細野　一敏　141 6
山法師子どもら息を太くせよ　秋尾　敏　142 5
色変へぬ松や地球は病んでゐる　神作　仁子　143 6
ゴージャスなアサギマダラのハネムーン　木之下みゆき　143 7

フロイデのひと声ふくら雀かな　中里　結

「フロイデ」、第九のテノールが耳に響く。「フロイデ」はドイツ語の「喜び」。その「喜びの歌」を作曲した時ベートーヴェンは既に聴覚を喪失していた。深い悲哀を経験した者は歓びに対して一入深い感受性を持つ。ふくら雀は厳寒を乗りきろうと羽を膨らませ陽だまりにチュンチュン。それは雀にとってフロイデ。そしてそれを見ている作者の、また読者の、原曲ベートーヴェンの。四者のフロイデ合唱が、ほら、きこえてくる。

玉山　政美

ほろほろと人を忘るる草の絮　清水　伶　140 4
突き当たるたびに道あり秋の声　永妻　和子　140 4
青の残像翡翠は印象派　長濱　聰子　140 5
自分史のところどころを紙魚走る　徳吉洋二郎　141 4
ひらがなの感傷でとぶ秋揚羽　菊地　京子　141 7
告白を聞く日傘ゆっくり回る　秋谷　菊野　142 5
権力のもどせばゆがむ捩花　秋尾　敏　142 5
歳時記も俺もボロボロ雲の峰　東　國人　142 7
金魚反転夕暮がこわれそう　久野　康子　143 5
朝霧の深みへおとすパンの耳　倉持　紀子　143 5
突き当たるたびに道あり秋の声　永妻　和子

子供の頃、路地が好きだった。大通りを逸れ、迷路のような路地を突き進んで遊んだ。時には家々の隙間にも紛れ込み、黒ずんだ外壁を見上げ、溝を跨ぎ、雑草を摘み、野良猫に触れ、ずんずん歩いた。でもいつしか、先の見通せる道だけを選んで歩く大人になった。行き止まりという落胆を知ってしまったから。もし、あの時、勇気をもってどん突きの先へ進んでいれば、と思う。今からでもまだ間に合うだろうか。この句に励まされている。

永井　奈々

早蕨や風の子としてわが余生　高木　一惠　140 5
香水の一滴完全なんてない　千葉　信子　140 5
銀杏降る9秒9はまた明日　普川　洋　140 5
自分史のところどころを紙魚走る　徳吉洋二郎　141 4
鶏鳴につられて亀の鳴きにけり　長井　寛　141 4
櫂の背で割る一面の花筏　石井　稔　142 6
人の名の薔薇に囲まれ人恋し　飯島　昭子　142 7
騙されてやるか白玉よく冷えて　加藤　法子　143 5
虫籠の戸が開いてゐる稲光　川又　優　143 6
敗戦忌君が代半音ずれしまま　小張　直子　143 7

平岡　育也

物差しに子の名うっすら十二月　袴田　菊子　140 4
水仙の系図いちばん上は海　直江　裕子　140 5
狐火や噂の火種飛び火せり　千葉　智司　141 4

縄文のビーナスのやうラ・フランス　浜岡　紀子　141 5
底冷えのサッシの溝の深さかな　藤岡　尚子　141 7
ふらここの言霊映画より静か　市川　唯子　142 5
崩れゆく球体感覚ほたるの夜　池田　博臣　142 6
噴水に真っ正直な芯がある　小林　実　143 5
二学期の音を集めて下足箱　小池美佐子　143 6
怖いのは同じ方向鮭のぼる　金子　未完　143 7
噴水に真っ正直な芯がある　小林　実

噴水を見つめていると、水は常に新しい水に変わっているが、その形に変化はない。水柱の中に周囲の変化にも動じない確固なる芯柱（しんばしら）を見たのでしょう。

上野　紫泉

身のうちの星座傾けメロン切る　清水　伶　140 4
侘助やパーキンソンてふ病ひ　檜垣　梧樓　140 5
風呂吹という円満なかたちかな　鈴木　一行　140 6
皇帝ダリア風に野望を盗まれて　羽村美和子　140 7
自分史のところどころを紙魚走る　徳吉洋二郎　141 4
心配するな充分生きた春の雨　細野　一敏　141 6
ふはふはの食パンの耳夢二の忌　深山きんぎょ　141 7
終戦のあの日正座の父の居て　岡山　敦子　142 6
海神へ汗つやつやと孕み馬　伊藤　希眸　142 6
ふらここや明日が怖くなかった日々　川上　典子　143 5

富澤さち子

マスク縫ひをり深夜放送よりワルツ　高野　春子　140 4
たてがみのそよぐ限りを冬銀河　清水　伶　140 4
星もまた旅してゐたり大冬木　中里　結　140 7
どこまでの炎天いつまでの汚染水　徳吉洋二郎　141 4
桃の日の靴脱ぎ石のよく笑う　森　ふみ子　141 6
ひそかに筋トレ水鳥が遠すぎる　菊地　京子　141 7
ふたりで老う十薬の花まっ平ら　山中　葛子　142 5
山は雪母の遺した刺繍糸　村田　珠子　142 7
居住権はふるさとにあり銀やんま　小林　俊子　143 7
ほうほたるどこかで遭っていませんか　木之下みゆき　143 7

小多田文子

ウイルスも地球生物日記買う　田沼美智子　140 5
黄泉よりも産土遠しどんど焼　徳吉洋二郎　141 4
日向ぼこして飼ひ馴らす孤独　高久　清美　141 5
さようなら言えず手袋うら返す　保坂　末子　141 6
相聞歌首を伸ばして亀鳴けり　星野　一惠　142 4
なんかいも生まれかわって黄落す　森村　文子　142 4
権力のもどせばゆがむ捩花　秋尾　敏　142 5
キャタピラー戦なき世の稲を刈る　山中　頼子　143 4
空海の道しるべなり曼殊沙華　小野　功　143 5
武器持たぬ自粛も戦幟立つ　金子　未完　143 7

小川トシ子

突き当たるたびに道あり秋の声　永妻　和子　140 4
階段のいちばん下の春の月　鈴木　瑩子　140 4
灯台も我も読点鳥わたる　長濱　聰子　140 5
動かざる山うごかして花万朶　長井　寛　141 4
さくら見ておくこの世が遠くなる前に　山崎　聰　142 5
権力のもどせばゆがむ捩花　秋尾　敏　142 5
小春日や詩集一冊分の旅　石井紀美子　142 6
いっさいは見えぬ重さの初詣　渡辺　澄　142 7
幕引きの遠く近くに春の雷　横須賀洋子　142 7
熱帯夜漂白されてゆく海馬　小野富美子　143 6

島　隆史

ほろほろと人を忘るる草の絮　清水　伶　140 4
置き去りのサッカーボール天高し　末廣　陽惠　141 5
弱点は斜めから見て大蚯蚓　松澤　伸佳　141 6
阿鼻なくて蜘蛛の綴れる蜘蛛の糸　市川　唯子　142 5
擦れ違ふとき早春のにほひけり　岡田　春人　142 5
キルト刺す一針ごとに掬う秋　川上　典子　143 5
白椿明日を思えば落ち切れず　加倉井允子　143 5
色のない芒が原の最終章　小池美佐子　143 6
居住権はふるさとにあり銀やんま　小林　俊子　143 7
手のひらに広がる空き地鰯雲　木之下みゆき　143 7
擦れ違ふとき早春のにほひけり　岡田　春人

シンプルな句。まだ、冬の寒さが残っている狭い道をうつむきかげんに歩いていて女性と擦れ違った。その瞬間、早春のにおいがした。もう春が来たのだ。新しい季節を迎えて生きていることの喜びを感じた。早春のにほひけりの表現に感動致しました。

田沼美智子

雲の峰なんかイチローの背中　武田　伸一　140 6
夢見ぐさ恋は伏せ字に寵りおり　武田　和郎　140 6
ヒヤシンス鬱のひとつが星になる　羽村美和子　140 7
原発の是非をさらった春怒濤　高桑婦美子　141 5
春愁がやたらとひつかかる嚥下　宮本美津江　141 7
メルケルを欲すこの国ただ寒い　吉田　耕史　142 6
万緑の力借ります接種の日　岩岡　方子　142 7
梅雨の明けても東京が主語である　田村　隆雄　142 7
無精卵不安ばかりが押し寄せる　小林　実　143 5
夜の底過去へ過去へと剥く林檎　小野富美子　143 6

松岡　節子

突き当たるたびに道あり秋の声　永妻　和子　140 4
白粉花の風は耳掻くおとに似て　千葉　信子　140 5
十二月八日母乳代はりに山羊の乳　中村　博子　140 6
フロイデのひと声ふくら雀かな　中里　結　140 7
小春日や詩集一冊分の旅　石井紀美子　142 6
避雷針みな天指してらいてう忌　東　國人　142 7
桐箱の古りしバリカン葱坊主　村上　澄子　142 7
青柿のどすんと記憶抜け落ちる　興津　恭子　143 5
噴水に真っ正直な芯がある　小林　実　143 5
夕暮れを引きとめている蕎麦の花　小多田文子　143 7

石井紀美子

揚羽一頭まつ白な雨あがり　高野　春子　140 4
句を詠むは死者との対話小望月　高橋　健文　140 5
すこしだけ蓬の匂いする母よ　武田　伸一　140 6
ふうせんかずら異端の風となら遊ぶ　羽村美和子　140 7
黄泉よりも産土遠しどんど焼　徳吉洋二郎　141 4
薄氷のかたちになってゆく晩年　長井　寛　141 4
心配するな充分生きた春の雨　細野　一敏　141 6
牡丹の芽アンモナイトが目を覚ます　池田　博臣　142 6
わくらばは風のうろこか定型詩　菊地　京子　143 4
海霧を柩に収め送り出す　越野　雄治　143 5

尾形ゆきお

石蹴の石だけ残る夏の街　菱木　良一　140 4
言葉とはあやうい容器青梅落つ　武田　伸一　140 6
煩脳も生きる術なり冬帽子　管ノ谷文子　140 7
胸底に小さきえんぴつ冬銀河　林　ゆみ　141 4
奇っ怪とは我が心なりなめくじら　富澤ムツ子　141 5
鱗粉のつきし少女の指も蝶　松本　千花　141 6
暗がりに鬼を繋ぎて沈丁花　大澤ひろみ　142 5
にんげんの奥へおくへと野火奔る　上野　紫泉　142 7
月光に呼ばれた茸から折れる　坂間　恒子　143 6
声なき叫びメタセコイアの深き森　佐藤　鈴子　143 7
鱗粉のつきし少女の指も蝶　松本　千花

一読上手いなあと感心した句。白魚のような指というのは常套句だが、掌ではなく、少女の指を蝶に喩えたのは、この句が初めてではないか。それによって、少女の指が繊細に動いている様子が想像できる。「指も蝶」と、最後に直喩で断言しているのも上手い。

蝶を掴まえて思わず着いてしまった鱗粉が、少女の持つ神秘性のようなものを暗示しているようにもみえる。本当にまいりました。

中村　博子

身のうちの星座傾けメロン切る　清水　伶　140 4
のどけしや底曳網を屋根に干し　長濵　聰子　140 5
星もまた旅してゐたり大冬木　中里　結　140 7
動かざる山うごかして花万朶　長井　寛　141 4
夕映えを吸いて牡丹暮れきらず　森　孝子　141 6
花野揺れ易したましい触るる時　三宅たくみ　142 4
十薬の根深し母の一代記　秋谷　菊野　142 5
山法師子どもら息を太くせよ　秋尾　敏　142 5
八月の水汲みながら産気づく　伊与田すみ　143 4
兄征きしまま八月の醤油樽　小張　直子　143 7
山法師子どもら息を太くせよ　秋尾　敏

数年前ある俳句誌に昭和末期附属中学校の先生をなさっておられた様子が掲載されていた。当時若い先生方が山法師の白き苞のごと無垢な子供達を激励しながら育んでおられた。子供達は清らかで意気込みがありそれに答えていた。（保護者の視点）現在の閉塞した時代に子供達への切なる想いが感じられる。

長井　寛

早蕨や風の子としてわが余生　高木　一惠　140 5
句を詠むは死者との対話小望月　髙橋　健文　140 5
言葉とはあやうい容器青梅落つ　武田　伸一　140 6
筍に灰汁あり俳句に侘びと寂び　実籾　繁　141 6
にんげんが見えて来るまで草むしり　門谷　杜人　142 4
ふたりで老う十薬の花まっ平ら　山中　葛子　142 5
さくら見ておくこの世が遠くなる前に　山崎　聰　142 5
青いレモン遠きあの日の忘れもの　石井紀美子　142 6
いぼむしり企業戦士も左派も老ゆ　小野　功　143 5
老いたるも恋こそよけれ蟬の殻　久保　筑峯　143 5
言葉とはあやうい容器青梅落つ　武田　伸一

「はじめに言葉ありき」とは新約聖書『ヨハネによる福音書』の冒頭の記述である。ノアの大洪水の後に人々が高い塔を立てようとして神の怒りに触れ、神は人間の言葉を混乱させた。以来人間同志の意志の疎通に混乱が生じ、結局はバベルの塔は未完成のままに終わったという。作者のいう「あやうい容器」の措辞がそれを物語っている。大雪が降る前の最後の木守り柿を見つけた鵯はどこまでも聞こえるような声で仲間を呼んでる光景に遭遇すると、いかにも心地よい気持ちにさせられる。言葉をもっている人間はとても鳥の様にはゆかないもの、平気で小さな青梅も落としてしまうではないかと詠っているのである。

津田沼研究句会報告

（於：津田沼一丁目町会会館）

●第三五六回（令和四年五月十日）

司会　白木　暢子

逃げ水になって青春さかのぼる　星野　一惠
鎖場を超えし乙女に山滴る　栗原　正子
宅配の青年夏シャツきめてくる　股野　久子
初めての老い藤房の重さかな　池田　博臣
明後日のやうな感覚ハンモック　竹田　彩子
トランプのジョーカー残り四月果つ　鈴木　瑩子
花は葉に育児休暇のだんな様　村上　澄子
武器頼む心のかなし御身拭ふ　高木　一惠
氏素性問われておりぬ染卵　徳吉洋二郎
洗い場に花文字を書く桜蕊　並木　邑人
天秤は傾いたまま五月闇　白木　暢子
微かなる風の香を追い徘徊す　なかもと淑子
聖五月涙多くて海となる　吉野　精
善人はなべて不自由柳絮飛ぶ　横須賀洋子
とき3号越後平野の五月晴れ　伊与田すみ
起き伏しの茶筅笥代わり冷蔵庫　増田　豊子
夜濯ぎの消えそうにない座の熱り　長井　寛

●第三五七回（令和四年六月十四日）

司会　徳吉洋二郎

手櫛ではなほらぬ寝癖沖縄忌　竹田　彩子
少年に音無く抜かれ五月雨るる　横須賀洋子
夏の蝶いくさの中の無重力　池田　博臣
寄りそひて倚りかからずや杜若　栗原　正子
雹降って言語障害残りおり　なかもと淑子
夏至の来てひっくり返す砂時計　長井　寛
慰霊の日句読点なき長い文　徳吉洋二郎
夏来る目の高さなる水平線　増田　豊子
花菖蒲ゆっくり流れている時間　星野　一惠
走り梅雨イチかバチかの鳩の恋　村上　澄子
新緑の芯のかがやきゴッホの黄　高木　一惠
全粒粉パンに空蟬スープなど　並木　邑人
誰がために水面を揺らす春の汐　鈴木　瑩子
泰山木の花仰ぐひと腰のばし　股野　久子
値上げ受け入れず朝顔の苗を買う　白木　暢子
夏来る戦争来るらし逃げるらし　伊与田すみ

●第三五八回（令和四年七月十二日）

司会　徳吉洋二郎

軍拡は国是かシュルシュル揚花火　高木　一惠
忘却あまた青梅の落ちる音　池田　博臣
文字摺草ほどいて別れ惜しみけり　横須賀洋子
津田沼に晴れた日あり梅雨の恋　吉野　精
炎昼や環状線の先細る　村上　澄子
国境は焦土の色に夕焼けて　星野　一惠
炎昼や寺に大蛇の古き墓　栗原　正子
干からびる蚯蚓と吾も野も町も　なかもと淑子
風の来てひとり以上の端居かな　増田　豊子
大向日葵闇夜にひそと肥る種　竹田　彩子
音もなく舞い了えるシテ瑠璃蜥蜴　並木　邑人
郭公やだれかが鳴らす指の笛　鈴木　瑩子
右脳左脳こんがらがって籐寝椅子　徳吉洋二郎
釣情報紙面をわかす梅雨の明け　股野　久子
ドクダミの束ね干したり収穫とす　伊与田すみ
隣人愛から始めよう夏の庭　白木　暢子

青葉研究句会報告

（於：千葉市民会館）

●第一二八回（令和四年四月二十八日）

司会　長井　寛

子を殴し真空の刻瑠璃蜥蜴　鈴木まんぼう
マネキンの口尖らせる夏始　越野　雄治
飛花落花干戈の響き今に聴く　矢野　忠男
蛇行する戦車の轍春の雷　徳吉洋二郎
灰燼の地満たせ蒲公英絮とばす　栗原　正子
花桃や子はそれぞれに方便得て　森井美惠子
集団移民春日傘は置き捨て　長濱　聰子
武器捨てよ芽吹きの大地いとほしき　横山　郁子
かわたれの鶏鳴後楽の八重桜　長井　寛
今日北へ旅するカバンうらやまし　吉野　精
花過ぎの遣唐使船帰らぬ日　池田　博臣
潮ぐもる軒端に座して浅蜊売り　加藤　法子
夜桜に違反切符を切られたり　石井紀美子
春北風卓上メモの乱兆す　山﨑　幸子
時空越え石の上でも双葉萌ゆ　加賀谷秀男
泥舟と鉢合せする花盗人　並木　邑人

●第一二九回（令和四年五月二十六日）

司会　徳吉洋二郎

レーニンの夢や向日葵の芯真黒　越野　雄治
手を入れる真実の口聖五月　森井美惠子
薄暑光鉄の匂いを連れて来る　並木　邑人
卓袱台に亡き人揃ふ螢の夜　山﨑　幸子
送信を押して投句や風五月　鈴木まんぼう
ともがらの一歩さきゆく青葉闇　池田　博臣
向日葵の首の高さにロシア兵　徳吉洋二郎
黄泉からの蝶の群がる白昼夢　石井紀美子
鬼やんま宙に錠なき「制空権」　長濱　聰子
牡丹真っ赤絵筆のなかに生き返る　加藤　法子
映画まね真紅のバラを贈っただけ　横山　郁子
風青しビーナスの生る真珠貝　長井　寛
新入りの大工真っ新青胡桃　栗原　正子
不二の峯真つ正面に夏立ぬ　矢野　忠男
春風に鳥の羽ずれ遠い空　加賀谷秀男
彼彼女真つくした聖五月　吉野　精

●第一三〇回（令和四年六月二十三日）

司会　並木　邑人

菩薩にも鬼にもなれずアッパーパー　鈴木まんぼう
なにやかや難題ばかり鱧の皮　池田　博臣
核の世も地球は一つ明け易し　長濱　聰子

ひと夏を遊び惚けてゴム草履　横山　郁子
宙冥し地球は青く滴れり　栗原　正子
自己流の天下一品梅を煮る　山﨑　幸子
なかなかにペンキ乾かぬ青蛙　加藤　法子
唐めざす大海原の水芭蕉　長井　寛
アクリルの区画を辿りつつ盛夏　越野　雄治
父の日やゼウスの箱の遺言書　徳吉洋二郎
青水無月はやぶさ2の試料に水　森井美惠子
余熱もて暮るる球場鬼やんま　石井紀美子
半球は西日のシャワー影送り　並木　邑人
音速の爆弾飛来麦の秋　矢野　忠男
くらやみをわがものがおに猫の恋　加賀谷秀男
父の日というめんどうなものまいったよ　吉野　精

柏研究句会報告

（於：柏市「ハックルベリー書店」2階）

●第一一六回（令和四年五月十四日）
司会　長井　寛

炎はいつも炎であり山菜植えつづけ　伊藤　希眸
天空へ雲雀イカルスの道を行く　髙橋　宗史
ベーコンのジリジリ鳴いて夏の朝　川上　典子
野ざらしとなりし車や竹の秋　中里　結
八十八夜檻のゴリラは考へる　岡田　春人
青春の道草遙か旧三省堂　佐藤　鈴子
モジリアニの女の倦さ葱坊主　藤好　良
自粛ほどけて初夏の丘に亀　野口　京子
蛇穴の出口あたりに捨て鏡　下村　洋子
湯が水になるにも力夏来る　椎名　鳳人
空耳の青葉若葉のコンサート　木之下みゆき
擬宝珠の真ん中にある歌ごころ　長井　寛

●第一一七回（令和四年六月十一日）
司会　長井　寛

密談のごと鯉の集まる梅雨の池　岡田　春人
放浪の行き着くところ蛇苺　髙橋　宗史
戦禍の余波じんわりじわり梅雨に入る　佐藤　鈴子
父の日や百万遍も嘘ついて　木之下みゆき
態度似るも生き様は別我と蟻　藤好　良
ジャワ更紗ふやりと初夏の風を呼ぶ　下村　洋子
愛鳥週間鴉まじめにとまってる　吉野　精
脊柱を輪切りにしたる稲光　椎名　鳳人
巫女卑弥呼小町楊貴妃薔薇の園　長井　寛

●第一一八回（令和四年七月九日）
司会　長井　寛

盆燈籠たしかに亡夫とすれ違う　野口　京子
銃声に積乱雲の崩れたる　下村　洋子
一茶庵の廊に居並ぶ花柘榴　佐藤　鈴子
全身の熱を鎮めてソーダ水　岡田　春人
雹の粒転がる鶏が走る　中里　結
閉ざされた記憶を喰らう水羊羹　藤好　良
静かさや夜明の和金酸素吸う　髙橋　宗史
黒黴に忍びごころや醸都野田　椎名　鳳人
夏の蝶ミトコンドリア騒がせる　木之下みゆき
ようやっと息つく小夜の冷蔵庫　長井　寛

君津研究句会報告

（於：君津市生涯学習交流センター）

●第二十五回（令和四年五月六日）
司会　徳吉洋二郎

何かしておらねば虚し蕗を煮る　前田　孝子
春耕や貝殻骨の音たてて　徳吉洋二郎
婿殿を連れて来そうな青田風　泉　志眞子
リラ冷えや平和の音が崩れてる　馬渕　津枝
トラック島の話ちぐはぐ蠅叩き　加藤　法子
雨音は過去のかけらや青ぶどう　小澤　富子
脈拍の音は秒針春惜しむ　田沼美智子
点滴の音なき音や花の雨　石井紀美子
どこへも行かず誰にも逢えず春は行く　森　孝子
のどけしや君がみむねの海潮音　長井　寛
薪能音無く夜は沈みゆく　鈴木　美幸
雷鳴か空中射撃か赤き音　長濵　聰子
夏めくやくるくる回る河馬の耳　山田たかし
この町に草餅売って三代目　羽矢　眞人
蛇穴を出づ鎌首もたげ背中光る　金澤　惠子
春陰やY字路奥に原節子　越野　雄治
運命を弾かれわたしピアノと年くれる　吉野　精
歩行許可出し蛙の応援歌　村田　満枝
まち起こしのネタに落人春北斗　並木　邑人
万緑や背筋伸ばして八十路かな　古賀　壽昭
母親の愛には勝てぬ春の月　佐藤　鮎美

●第二十六回（令和四年六月一日）
司会　越野　雄治

どくだみの庭を誉め来る薬売り　村田　満枝
鈍色の空芍薬の白崩る　泉　志眞子
良薬より自由が欲しい夏の空　佐藤　鮎美
葉桜や一枚残る回数券　小澤　富子
草蛍天に逢いたき人数多　山田たかし
薬包紙の鶴とばす子規花糸瓜　田沼美智子
原っぱに子供のいない子供の日　加藤　法子
頭より脱ぐ孤独一枚夏木立　長濵　聰子
夏めきて路を這うホース自由主義　長井　寛
あれこれありてあつといふまの心太　越野　雄治
成長も寿命もいとし薬の日　馬渕　津枝
朧夜や名句の中にとけていく　石井紀美子
夏が来る觔斗雲から降りてくる　徳吉洋二郎
後添えの厨新たに夏料理　羽矢　眞人
黒南風やコストコの基地ぞめき立つ　並木　邑人
遠雷の父の怒りの胸響く　古賀　壽昭
あさなさな住職愛でる月見草　金澤　惠子
陽炎に眞がのって去ってゆく　吉野　精
ランドセル若葉の下で夢が鳴る　鈴木　美幸
鉄塔の銀の垂直夏来る　前田　孝子
新薬の朗報捉え燕来る　森　孝子

ひろば

第一五五回 野田俳句大会

四月二十三日（土）、欅のホールにて千葉県俳句作家協会会長能村研三氏を招き開催。出席者五十九名、欠席投句者七十三名、参加者計百三十二名と盛況であった。席題は「目刺焼く」。なお、本大会より学生（高校生）の部を新設、三百句を越える投句があり、三名が秋尾会長の特選賞に輝いた。

【入賞者作品】三句（欠席者二句）合点

市長賞

目刺し焼くみすずの海をしたたらせ　星野　一惠

教育長賞

ど忘れの一つや二つ目刺し焼く　鈴木　弘子

議長賞

足腰を鍛え元気な蛇になる　岡田　春人

連盟賞

青き踏む海光とどく所まで　吉田　叔子

高校生の部（秋尾敏会長特選）

思春期はじめじめとくるう梅雨のよう　西武台高校　渡辺　航太

正月　皿に余る　刺身醤油　西武台高校　大前　昴己

初嵐クレーマーが来たレジバイト　あずさ第一高校　鈴木　夕菜

図書紹介

■ **句集「寸法直し」　津高里永子**

令和四年二月刊　東京四季出版

伊勢まゐり白き儒艮に会うてから
初蝶や棚にぶつかるたび光る
どちらにも流るる川かハンモック

■ **「昭和俳句の挑戦者たち」　近藤　栄治**

令和四年三月一日刊　創風社出版

かつて現代俳句評論賞を受賞した著者が、草城と誓子、窓秋と白泉、中村草田男の三部立で、新たな表現領域を開拓した彼らを俳句の挑戦者として紹介した意欲作。

掲示板

《会員・会友異動》

● **移転**（会員）渡部　健（福島県より）
　八島岳洋（宮城県より）
● **退会**（会友）松﨑あきら、竹中華那、坂本千惠子
● **新会員・新会友**
　立神　作造（会員）木之下みゆき紹介
　石井　恭平（会員）羽村美和子紹介
　篠田　京子（会員）羽村美和子紹介
　栗原　正子（会友）徳吉洋二郎紹介
　渡辺しげ子（会友）徳吉洋二郎紹介
　横山　郁子（会友）秋尾　敏紹介

◆秋の吟行会のお知らせ

場　所　谷津バラ園・谷津干潟
日　時　令和四年十月三十日（日）
句会場　船橋市勤労市民センター
　十二時五十分より受付
嘱目二句（投句締切十三時二十分）
＊詳しくは同封のチラシをご覧ください。
＊欠席投句も歓迎です。

※現代俳句協会令和四年度会費納入はもう、お済みでしょうか？

会費の一部は、千葉県現代俳句協会の活動費の原資となっています。まだの方は、お早めにお納め願います。払い込み用紙を紛失された方は事務局（岡田）までご連絡ください。

訂正とお詫び

・前号吟行会入賞者に漏れがありました。
　九位　松本千花さんでした。
・前号新会員新澤誠さんの作品として記載された三句の作者は西村峰子さんでした。
　（今号に再掲いたしました。）

□□ 事務局・編集部だより □□

● 猛暑とコロナ感染拡大で今年の夏も終りですね。編集部は白木・林・川上の新メンバーと、石井・森井・木之下の六名で頑張っております。秋の吟行会、皆様ご参加ください。

現代俳句千葉　第一四六号
令和四年九月一日発行

発行人　千葉県現代俳句協会
　会長　並木　邑人

現代俳句千葉編集部
〒278-0037 野田市野田
六七七-一-A二一五
木之下みゆき

千葉県現代俳句協会事務局
〒277-0084 柏市新柏二-十三-六
岡田　春人
TEL・FAX 〇四-七一六一-一六三九